市制100周年記念 特別賞

神子　知菜（かみこ ともな）　東京純心女子中　２年生

図　書：星の王子さま

「星の王子さま」は、一度読んだだけでは深く理解することができない物語だと思いました。私は、このような哲学的な本を読んだことがなかったので、一つ一つの言葉の意味をしっかり捉えて、じっくり読むには、二、三回読まなければなりませんでした。しかし、何度読んでも飽きなかったのは、この物語の言葉の多くが、読者の私に語りかけてくるように感じたからだと思います。普段の生活の中での何気無い言動がどれほど大きなものなのかをこの本で知ったようにも思いました。

「おとなの人たちに<桃色のレンガでできていて、窓にジェラニュウムの鉢がおいてあって、屋根の上にハトのいる、きれいな家を見たよ…>といったところで、どうにもピンとこないでしょう。おとなたちには<十万フランの家を見た>といわなくてはいけないのです。」これは、この本の中の言葉です。私は、この言葉の中の「おとな」は全ての「大人」を指しているわけではないと思います。日本では、二十歳からが大人ですが、大人でも子供のような人はいるし、子供でも大人のような人はいます。この言葉の指すおとなとは、そのものの、真の美しさを感じとろうとしない人のことだと思いました。この場合、家のどのようなところが美しかったのか、ではなくお金にしたらどのくらいの値打ちがあるか、を大切にしているということです。確かに、どのくらい価値のあるものかをどのくらいの値打ちがするのかで表すことはよくありますし、わかりやすい表し方だと思います。値段の高い物ほど美味しかったり、壊れにくかったりと、良い点もたくさんあります。しかし、値打ちではなく、美しさや素晴らしさを伝えたいときだって、たくさんあります。それが人に伝わったときは、すごく嬉しいのです。絶景スポットを教えるのは、とても簡単です。写真や映像を見せることもできますし、理解することも容易です。けれども、原宿で流行しているファッションのかわいらしさを、いくら好きな若者が誰かに伝えようとしても、すべての人が理解してくれるとは限りません。理解してもらえなかったとき、「そんな安物が」や「そんな高いお金払ってバカみたい」などと言われることが一番傷つくのです。私も、お金など関係ない、と思いつつも好きなものを否定されたとき、理由がお金に関わっていると悔しくてたまらなくなります。人それぞれ感性は違うし、理解してもらえない

ものがあるのはあたりまえです。しかし、自分にとってのそのものの価値を、お金があれば買える、と思われてしまうことが、嫌なのです。誰にでも、そのような「こだわり」に似た価値観があるのではないでしょうか。私は、この言葉を読んで、そう思いました。

また、私はこの本を読むまでそのようなことに気付かず、人を傷つけてしまったこともあります。その人なりのやり方を、別の人と比較してしまったり、そのものの特徴を聞いても、あまり興味がわかなかったものも、値段を聞いたら驚いて、たくさん質問したり、ということです。その人の大切にしている価値観をせっかく分けていただいたのだから、お金や評判などのものさしではかるのは、そのものの価値をしっかり理解できたときだけにしようと思いました。

そして、この物語の中で、王子さまが、七つの星を旅するシーンがあります。それぞれの星で出会った人たちは、人間の悪いところを描いているのかな、と思いました。権力をふりかざす王さま、うぬぼれ男、我慢のできない呑み助、お金にしばられた実業屋、自分で動こうとしない地理学者。五ばんめの星の命令に忠実な点燈夫は別ですが、その他の星で出会った人のようなところは誰にでもあると思いました。その人々のよう、といっては大げさですが、そのような悪いことをしてしまったこともあります。「姉だから」といって弟や妹にテレビのリモコンを持ってこさせたり、人にほめてもらって調子にのったり、自分の利益ばかり考えてしまうこともありました。「人のふり見てわがふり直せ」ということわざもあるように、このシーンを読んで、これからは相手の立場になって行動を考えなおそう、と思いました。

「星の王子さま」には、作者のサン・テグジュペリの、自分の感性や価値観、そして相手の心を感じとることを大切にすると良い、というメッセージがこめられていると思いました。それは言葉だけでなく、挿画からも伝わってきました。そして、その思いを行動にうつしていけば、もっと生きることは楽しくなるんだ、とも思いました。また、内藤濯さんというかたが訳したそうですが、内藤さん自身も、サン・テグジュペリの思いを理解していたのだろう、と思い、違う言語でも、思いやメッセージは伝わるんだ、と言葉の持つ力に驚きました。